

---

# シャドウナイト

進藤 翡翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シャドウナイト

### 【Nコード】

N7662Z

### 【作者名】

進藤 翡翠

### 【あらすじ】

「情報部は言わば、影の騎士だ。如何なる場所にも潜入し、如何なる人間にも偽装する。潜入と調査が密偵の基本だ」

彼らはその言葉の胸に深く刻み、影の騎士として活動する。

ランスブルク王国騎士団情報部に所属する密偵達の物語。

（この物語はTRICKさんとの共同制作で、TRICKさんの物語と世界観を共有している作品となっております）

「イレネ・ケイフォード」

今日の座学が終わると、唐突に教官が言った。

私は座ったまま、はい、と答える。

……私はランスブルク王国騎士団情報部の持っている密偵養成所で一年間の教育を受けていた。この養成所の存在は秘密。端から見ても、養成所が情報部の物と分かるようにはなっていない。民間ギルドの新人育成のための養成所を偽装した見た目も小汚い建物になっている。街の人々は、この建物が密偵を要請するための施設だとは知らない。知っているのは、この建物の中に居る者だけだ。

養成所の唯一の生徒である私と、教官だけが居る教室で、教官は眉間に皺を寄せた厳しい表情で私を見据え、後ろ手を組む。

何を言われるのだろうか、と私は身構えた。

「今日、情報部から辞令が出た。本日付で、君はランスブルク王国騎士団の情報部の一員として、正式に情報部に配属される。君が此処に来て、少しばかりの付き合いだったが、私からもおめでとうと言わせて貰おう」

教官は後ろ手を組んだままの格好で教壇から窓の方へ徐に移動し、窓越しに外の景色を少しばかり眺めて、私の方を向く。

「改めて、おめでとう」

教官は突然の事に茫然としていた私の前に来て、一枚の書類を机に置く。私はそれを手に取って内容を確かめる。

書類は、教育課程の修了と、正式に情報部に配属になるという旨の辞令だった。

私は、身体を空に投げ出してしまいたい程の歓喜を感じながら、短いようで長かった一年間を思い出す。

……私はこの養成所で調査、尾行に、円滑な人間関係の形成法、別人への偽装から、短剣や槍などの様々な武器の取り扱い、素手で

の格闘術に、国家の情勢という様々な訓練を受けた。それらは、男でも血を吐くような過酷さで、特に戦闘における技術の実技は、女である私にとっては地獄のような時間だった。

そんな一年間の努力がようやく実った喜びから、私は机の下で思わず拳を作った。

これで私は晴れて情報部の密偵となれる。やった、と心で叫ぶ。

だが、素直に心境を顔に出さない訓練も行って来た。私は手に取った書類を再び机の上に戻して、承ります、と冷淡に言った。

だけど平静を装っている私の心境など、教官ならとくに見透かしているのだろう。教官は机から辞令の書類を取り上げて、次に別の紙を置いた。先程と同じように私はその紙を手取る。

今度渡された紙には、地図が描かれている。それは、王都の地図。王都のある場所を示している。

私は、地図の全体に目を通して、見たままに全てを記憶する。内容を記憶するまでにそう時間は必要ない。そのように養成所で訓練されていた。

密偵は書類などを受け取る事は無い。任務に関する物や、機密に関わる物であれば尚更だ。出された書類も必ずその場で内容を記憶し返却する。そのため、養成所でも、まずは出された紙に書かれている文章を短時間で記憶する事から密偵の養成は始まる。今では反射的に、見た物、聞いた物を瞬時に記憶する癖が出来てしまった。

私は地図を机に置くと、上官がそれを取り上げて口を開く。

「すぐにも王都に向かって旅立て。今から出発すれば二日で辿り着くだろう。王都に着けば、地図に書いてあった場所に向かえ。そこに情報部がある。先程の地図の場所を頭に叩き込め。それが、卒業試験だ」

「はい」

私は養成所を後にして、今居る地方の街から王都行きの辻獣車を捕まえて客車に飛び乗った。王都までは長旅になる。まずは疲れた身体を休ませようと、御者に少し寝るからと告げて、壁に背を凭れ

て目を瞑ったが、あまり眠る事は出来なかった。

獣車の客車で過ごす時間は、やはりかなり退屈だった。御者との詰まらない世間話をして、話す訳にはいかない仕事の話を上手く御者から回避した。それでも会話がある内はまだ良くて、話す事も無くなつて。私はどうしようもなく暇な時間を過ごした。

王都に到着したのは二日後の、日の出の頃になっていた。

獣車を降りて御者に代金を手渡す。辻獣車の代金は養成所で受け取っていたから、十分に払う事が出来た。多少のお釣りも返って来た。

ランスブルク王国王都セントラルに入る正面大門で、獣車の御者と別れを告げて、暁光に照らされ始めた王都の美しい街並みを眺める。地面に敷き詰められた石は、朝の陽光に橙色に染め上げられている。橙黄色と黒の絶妙な色が街に溶けている。私の影もそこに溶け込んで、街の美しい色合いの一部になっている。

「ふう」

私は背伸びを一度して、気持ちを作り直して、歩き始める。靴が地に整えて並べられた敷石を蹴り付ける音が一定の間隔で物静かな街に響く。もう少し時間を遅らせると、人で賑わう中央通りを途中で路地裏に入り、そこから更に奥へと進む。

朝日の届かない路地裏をずっと歩く。暫く進んだ先、人気の無い場所にある建物の前で立ち止まり、その建物の入り口を見る。

「此処か」

養成所で教官から差し出された地図に描かれていた場所、目的地と記されていた場所は、確かに此処で違くない。私は、地図の描かれた紙の汚れまできちんと記憶している。間違いは無い筈だ。

私の眼前には三階建てぐらいの建物。その全体を見ても、入口だけを見ても、古く小汚い建物だ。本当に此処に情報部が入っているのかさえ訝しく思えたが、それも偽装なのだろう。周囲を見渡し、一応の安全を確認する。

建物に足を踏み入れると、すぐに奥から男性がやって来た。彼に

名前を問われ、私がイレーネ・ケイフォードだと確認されると、奥にある部屋の前まで案内された。この部屋で誰かが待っている、という事なのだろう。

その人物は、大体想像は付く。

私は意を決して、扉を二度叩いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7662z/>

---

シャドウナイト

2011年12月25日01時03分発行